

# 『西欧人の眼の下に』に於ける語り手の問題について

藤 原 洋 樹

岡山理科大学教養部  
(昭和57年9月24日 受理)

## 序 論

ジョセフ・コンラッド (Joseph Conrad) の作品をいくつか読んでみれば、以前彼に貼られていた「海洋小説作家」というレッテルがいかにふさわしくないものであるかがわかり、そういうレッテルを貼られた時のコンラッドの悲しさ口惜しさを察してやりたいと思う。と言うのも当時19世紀の終りから20世紀の始めにかけて、彼ほど小説の技巧という事に真剣に取り組み苦悩した作家は数少なかったからである。彼は40才ごろまで船員をやりその後小説を書き始めたので、当然始めのうちは船員時代の経験や船員仲間から聞いた話などを基に書いていったわけである。その頃の代表的なものとして『闇の奥』('Heart of Darkness') とか『ロード・ジム』('Lord Jim') といったそれぞれ中編、長編の小説があるが、これら両方の作品とも「海洋小説」という言葉から受ける安っぽい印象からは程遠い、人間の真実特にその弱さ苦悩を描いた傑作である。

コンラッドはこれらの「海洋を背景とした小説」の種を切らした後、「政治を背景とした小説」(「政治小説」ではない) を3作書いている。即ち出版年代順にあげれば、『ノストローモ』('Nostromo', 1904年), 『密偵』('The Secret Agent', 1907年), 『西欧人の眼の下に』('Under Western Eyes', 1911年) であるが、これら3作はいずれもそれまで自分の経験を題材に書いてきた小説とは多少異なり、言わばコンラッドが作家としての眞の創造力を駆使し苦しみながら産み出した産物なのである。そういう意味で、これらの作品は彼の小説家としての才能とその限界を見極める上で特に重要なものだと言える。

コンラッドは多分にドストエフスキイの影響を受けている様で、『西欧人の眼の下に』を一読して感じる事は、この作品の主人公ラズモフと『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフの行動と心理が非常によく似ているという事である。

ラスコーリニコフは金貸しの老婆とその妹を殺した後、警察の尋問にもよく耐えて白状しないが、ソーニャという娼婦の純粋な精神に出会い、やがて自首をし、自分の犯した罪の償いをする。一方ラズモフは、ロシア政府の要人を爆弾を投げつけて殺したハルディンという革命家の友人が彼を頼って来るが、警察に売る。その後警察のスパイとして革命家達の仲間にに入るが、自分がハルディンを警察に売ったという事はうまく隠しあおせる。し

かし結局ハルディンの妹ナタリーと知り合い、革命家達の前で自白し、彼らに殴られてつんばになり、その上馬車にはねられて不具者になり、罪の償いをさせられる結末となる<sup>1)</sup>。

さて、『西欧人の眼の下に』は題名を見てもわかる様に、「一西欧人から見たロシア」という形で書かれており、主人公ラズモフはロシア人である。ロシアの圧制を背景にしているという点で、ロシア領ポーランドの出身であり父親が熱烈な愛国主義者でロシア政府に反抗し流刑されロシアに対してはある特殊な感情を抱いていたコンラッドにとって、この作品は自らの暗鬱な過去に接触した異色のものであり、又それだけに我々コンラッドを研究する者にとっては興味深いものである。

この小論では特にこの作品の語り手の問題について考えてみたい。

## 本 論

コンラッドの小説における語り手の問題を論じる場合、マーロウ船長 (Captain Marlow) の存在を無視して論じる事は出来ない。と言うのは、彼はコンラッドの複数の作品に登場する唯一の語り手だからであり、『闇の奥』とか『ロード・ジム』といった傑作が生まれたのも語り手としての彼の存在に負うところが大きいからである。マーロウはこの二作品の他に『青春』('Youth') と『偶然』('Chance') にも語り手として登場している。

F・R・カールは語り手マーロウについての様々な説を列挙し、自分の考えを付け加えている。

多くの批評家は、コンラッドがマーローを心理的に必要とした点について様々の意見を述べた。すなわちコンラッドはマーローあるがゆえに、かれの小説に直接、接触しないですんだ。マーローはコンラッドに芸術家としての安心感と、作家としての便宜とをあたえた。マーローは作者の内面的な声を人格化した登場人物である。マーローはコンラッドが間接的に個人的な批判を加え、小説中に遍在することを可能にした。マーローは理性や分別には頼らず、直観にのみ頼る船乗りコンラッドである。コンラッドの作品において、「読者の眼前に展開される事件を広々とした平野に例えれば、マーローはその上をつねに徘徊している鳥のようなもので、小説の主觀性を象徴している。」

さらにマーローについて次のような意見を述べた批評家もいる。すなわちマーローの「イギリス人らしさ」は、コンラッドにかれの帰化したイギリスを感じさせた。マーローの体験は、人生が一連の偶然、および風聞にすぎないことを証明した。また、抑制ある語り手としてのマーローは、作者が創作過程を意識すべきであるというコンラッドの信念に適している。それゆえ、コンラッドの創作過程において、マーローは

事件の脈絡を統制する。ちょうどコンラッドがマーローの動きを調節して、作品を調整したように。この最後の点を、筆者は強調したい。なぜならマーローが主に果しているのは、筆者の考えによれば、あくまでも手法的な機能だからである。<sup>2)</sup>

ともかくマーロウは、船乗りという点から言っても保守主義的な考え方という点から言っても、作者コンラッドの代弁者である事に間違いは無く、マーロウを小説の語り手として登場させえた事が、コンラッドが彼独特の小説を産み出す大きな要因になったと思われる。

さて問題の『西欧人の眼の下に』の語り手は、コンラッドの分身とも言えるマーロウではなく、同じイギリス人ではあるが船員ではなく初老の語学教師である。彼はナタリーに語学を教えていた関係で主人公ラズモフと知り合い、彼の手記をナタリーから託され、この物語の語り手を勤める事になる。

この作品を読んでいて一番気になる点は、語り手のイギリス人語学教師が、自分には想像力、表現力を持った小説家の資質など無い事、従って自分の語っている事は虚構ではなく事実だけである事を、再三再四断っている点である。第一部の冒頭でこの語り手は次のように述べている。

To begin with I wish to disclaim the possession of those high gifts of imagination and expression which would have enabled my pen to create for the reader the personality of the man who called himself, after the Russian custom, Cyril son of Isidor—Kirylo Sidorovitch—Razumov ...

Even to invent the mere bald facts of his life would have been utterly beyond my powers. But I think that without this declaration the readers of these pages will be able to detect in the story the marks of documentary evidence. And that is perfectly correct. It is based on a document; all I have brought to it is my knowledge of the Russian language, which is sufficient for what is attempted here.<sup>3)</sup>

ところが、この第一部というのは語り手がラズモフの手記だけを基に語っている部分であり、皮肉にもこの作品中最もリアルで小説家の資質を遺憾なく発揮した部分となっているので、この語り手の言葉は到底文字通りには受け取れない。良く言えば、イギリス人の美点だとされている謙虚さを表わしていると言えるかもしれないが、それよりむしろ偽善的な感じを与えていた。又第二部第三章では Madame de S—についての情報を述べるところがあるが、その後自分が何故そういう事を知っているのかについて、再び自分には小説家の資質などない事に言及し、その情報源をわざわざ断つたりしている。しかしこの事に

よってなんらかの効果があがっているとは思われないし、又読者にとって、その情報源を知らされてもなんら得るものはない。ただ語り手の語り手としての自信の無さ、或いは読者への過度の心遣いといったものを感じさせるだけに過ぎず、マイナスの効果が出ている。

勿論これは、この作品にリアリティを持たせようとした作者の単なる技巧の失敗である筈はなく、もっと根本的なところ即ち語り手の選択になんらかの問題点が含まれている事を暗示している様に思われる。

この作品の語り手の選択を考えてみると、大きく分けて三つある。

- ① 全知の語り手、即ち作者自身
- ② 主人公ラズモフを含めたロシア人
- ③ 西欧人

この三種類の語り手のうち、どれがこの作品の語り手として最もふさわしいのかという事であるが、それを決定するのにこの作品の主題というものが大きな比重を占るのは言うまでもない。この作品は最初『ラズモフ』という題名で書き始められたが、この『ラズモフ』の主題についてコンラッドはジョン・ゴールズワージィ宛てた手紙の中で次の様に述べている。

The psychological developments leading to Razumov's betrayal of Haldin, to his confession of the facts to his wife and to the death of these people (brought about mainly by the resemblance of their child to the late Haldin), form the real subject of the story.<sup>4)</sup>

この事は、題名が変わりストーリーも多少変わったとはいえ、『西欧人の眼の下に』についても当てはまるので、この作品の主題は主人公ラズモフの心理的展開であると言ってよい。とすれば、この作品の語り手としてはラズモフの心のひだの動きをよく理解する事の出来る①か②の語り手、即ち作者自身或いはラズモフを含めたロシア人のほうがより適切であり、③の西欧人は適切ではないと言える。コンラッド自身も一般に西欧人にはロシアの事は理解したないと述べている。

This pitiful fate of a country held by an evil spell, suffering from an awful visitation for which the responsibility cannot be traced either to her sins or her follies, has made Russia as a nation so difficult to understand by Europe. From the very first ghastly dawn of her existence as a State she had to breathe the atmosphere of despotism; she found nothing but the arbitrary will of an obscure autocrat at the beginning and end of her organisation. Here arises her impenetrability to whatever is true in Western thought. Western thought, when

it crosses her frontier, falls under the spell of her autocracy and becomes a noxious parody of itself.<sup>5)</sup>

この様に主題から見ても題材から見ても、西欧人はこの作品の語り手としては適切ではないと思われる所以である。ところが、実際には『ラズモフ』から『西欧人の眼の下に』に変えられた題名が示す様に、作者コンラッドはこの語り手にふさわしくない西欧人を敢えて語り手を持って来ている。これはどういう事を意味しているのであろうか。この作者の不可解な語り手の選択は、この小論の序論で触れた作者のロシアに対する特殊な感情を考慮しなければ、説明がつかない。即ち、この作品の題材があまりにも作者の過去のいまわしい経験に接触したものであるので、彼の感情がもうに出てしまう可能性の高い作者自身が語る全知の語り手の立場、或いはロシア人の語り手の立場は取れず、作者がこの題材をうまくこなすには、どうしても一つの歛止めが必要となり、その歛止めの役を果したのがこの西欧人の語り手だったと思われる。このあたりの事情について、作者はこの作品の「作者覚え書」の中で次の様に述べている。

The obligation of absolute fairness was imposed on me historically and hereditarily, by the peculiar experience of race and family, in addition to my primary conviction that truth alone is the justification of any fiction which makes the least claim to the quality of art or may hope to take its place in the culture of men and women of its time. I had never been called before to a greater effort of detachment: detachment from all passions, prejudices and even from personal memories.<sup>6)</sup>

一般に全知の語り手以外の語り手というのは、作家が題材に対して一つの視点を限定し、その限定された視点を通して題材から一歩距離を置いた所から客観的な立場で題材に取り組める便利な手法であり、コンラッドもマーロウという自分の影武者の存在の語り手を創造し、彼の限定された一つの視点を用いて、いくつかの傑作を生み出してきたわけであるが、この作品の語り手である西欧人は、そういう一般的な限定された一つの視点という役割とともに、更にもう一つの役割即ち作者のこの題材に対する特殊な感情の歛止めという役割を背負わされているわけである。

こういう言い方をすると、コンラッドは『西欧人の眼の下に』の語り手の語学教師にマーロウ以上の重要な役割を持たせている様であるが、実はそうではない。上に述べた様に、コンラッドは語り手に二つの役割を持たせているわけであるが、言い方を変えれば、この語り手はコンラッドにとってこの小説の枠組をこしらえる為だけに必要な存在であり、前に引用したF・R・カールの言葉を貸りれば、「この語り手が主に果しているのは、あく

までも手法的機能だからである。」即ちこの西欧人の語り手はこの小説の形式にとっては、一つの歯止めとして、無くてはならない存在ではあるが、小説の内容に働きかける積極性は全く持たされておらず、常に傍観者的態度を取っているからである。語り手自身、自分は西欧人だからロシアの事はよく理解出来ない、従って自分は語り手としてふさわしくない事を悟っている様に思われる。

I felt profoundly my European remoteness, and said nothing, but I made up my mind to play my part of helpless spectator to the end.<sup>7)</sup>

ロシア人ラズモフの心理的展開というこの小説の主題を語るには、西欧人はふさわしくない事を考えれば、語り手のこういった傍観者的態度も理解出来る。

前にも述べた様に、第一部はラズモフの日記だけを基に語り手が語っている部分であるが、ラズモフのハルディンを裏切る前後の心理が実に見事に描かれており、語り手の偽善性を感じさせられるわけである。しかしこの語り手にはロシアの事がよく理解出来ないとすれば、この第一部は明らかに語り手が語っているのではなく、語り手という枠を設けておきながら、その語り手の存在を突き破って、作者自らが語っている事にならなければならない。従ってこの語り手の偽善性と感じられたものは、実は偽善性ではなく正直さという事になる。即ち自分が語り手としてふさわしい存在ではない事に対しての正直な告白である。第二部以後でも各所で、語り手は自分の語り手としての資格の無さを吐露しているわけである。

更に読者は、この小説の枠組としての語り手の存在を最初は意識しているのであるが、小説の内容の進展とともに、ともすれば彼の存在を忘れ勝ちになる。これは語り手が小説の内容に対して積極的に働きかける事なく、常に傍観者の態度を取っている事にも原因があるが、それとともに文体上の手法にも原因があると思われる。それは例えば、ナタリーの語る話を語り手が間接的に読者に伝える時、ナタリーの話に quotation mark をつけ、彼女の話の中に挿入された彼女と第三者との会話は double quotation mark をつけるのが普通であるが、そうしないで、ナタリーが語学教師の語り手に溶け込んで語っているかの様に、彼女の話から quotation mark がはずれて地の文に移行し、彼女と第三者との会話に単に quotation mark をついている点である。この作品の次に書かれた『偶然』が良い例であるが、一見 double quotation mark を用いたほうが読者にはわかり易い様に思われるが、実際は複雑になると大変煩わしく読みにくい。それに較べて、この作品はそういう場合でも単に quotation mark だけで済ませているので、quotation mark をつけた会話が語り手とナタリーのものか、或いは彼女の話の中に挿入された彼女と第三者との会話か、時にまごつく事があり、又更には語学教師の語り手の存在が忘れられるくらいがあるにせよ、『偶然』よりは読み易くわかり易い事は確かである。それにこの語り

手は、作者にとって形式的にのみ必要な存在であるのだから、読者が語り手の存在を忘れてしまう事自体、作者の意図と言えるであろう。

以上述べてきたように、コンラッドが『西欧人の眼の下に』の語り手としてふさわしくない西欧人を語り手として登場させざるを得なかったところに、語り手が自分の語っている事の真実性を不必要に強調せざるを得ない原因があるわけであるが、そこに又この作品の弱点らしきものがあり、更には作家コンラッドの才能の限界がある様に思われる。しかしこの作品は、そういう弱点らしきものがあるにも拘らず、又『罪と罰』との類似性があるにせよ、一つの傑作と言ってもよいものに仕上がっている。即ちこの作品にふさわしくない西欧人の語り手を一つの歯止めとして、コンラッド自身が語り、成功しているわけである。語り手と同じ西欧人であるコンラッドに何故そんな離れ技が可能であったのか。この疑問の解答として、鈴木建三氏の述べておられるコンラッド観を、本論の締めくくりとして引用しておきたい。この引用は、『西欧人の眼の下に』のロシアに関するものではなく、『ノストローモ』の南米に関するものではあるが、これはロシアについても当てはまると思われる。

そしてこういった『ノストローモ』の世界全体が見えていた作者のコンラッド自身はひどく認識力があったわけだけれど、このような後進国的なメンタリティとか、知識人のありようについて彼がこんなによく知っていたのは、実は彼が典型的な西欧人ではなく、西欧コンプレックスにとりつかれていたマージナル文化の人間で、その目で西欧を見たから、南米の世界さえもあれほどよく見えたのであり、それが彼の取り得である…<sup>8)</sup>。

### 結 論

コンラッドの『西欧人の眼の下に』という作品は、ロシア人が主人公であり、語り手は題名の示す通り西欧人である。そしてこの語り手は、作者の自我を抑制する歯止めとして、形式の上からは作者にとって是非必要な存在として登場させられているが、実際に語っているのは作者自身であり、語り手は自分の機能を果たし得ない無能な語り手となっている。又文体の上からも、作者は語り手の存在を読者が忘れてしまう様な書き方をしている。この事は語り手自身も十分認識しており、自分は語り手としてふさわしくない事を随所ににおわせている。作者は語り手を設定しておきながら、言わば語り手を無視するような形で自ら語っているので、語り手を用いるという手法の上からは失敗しているけれども、枠組としての無能な語り手を用いる事によって、皮肉にも自我の虚構化に成功し、作品自体はリアリティを持った作品になっている。

コンラッドの作家としての才能の衰退の時期については、あれこれ云々されているが、

それに関する私の直観的私見を最後に提示してこの論を終りたい。人間のいかなる才能についても（特にそれが目に見えない抽象的な才能の場合），その才能の衰退し始めた時期を明確に決定する事は，それこそ人間の能力を越えた不可能事である。ただコンラッドは小説家であり，多数の作品を残しているので，その作品を綿密に調べていけば大まかな判断は出来る筈である。ただこれから提示する私見は，綿密に調べた結論では無く，あくまでも直観的なものであり，多少とも議論の対象にされれば有難い。

この私見の発端となったのは，『西欧人の眼の下に』のすぐ前の作品『密偵』の「作者覚え書」であり，その中でコンラッドは次の様に述べている。

The inception of "The Secret Agent" followed immediately on a two years' period of intense absorption in the task of writing that remote novel, "Nostromo," with its far off Latin-American atmosphere; and the profoundly personal "Mirror of the Sea." The first an intense creative effort on what I suppose will always remain my largest canvas, the second an unreserved attempt to unveil for a moment the profounder intimacies of the sea and the formative influences of nearly half my life-time. It was a period, too, in which my sense of the truth of things was attended by a very intense imaginative and emotional readiness which, all genuine and faithful to facts as it was, yet made me feel (the task once done) as if I were left behind, aimless amongst mere husks of sensations and lost in a world of other, of inferior, values.<sup>9)</sup>

この一節は，『ノストローモ』と『海の鏡』を書き終えた後，作家コンラッドの内部で今まで張りつめていたものが突然音を立てて崩れていった様な感じを与える。私にはこの二つの作品はコンラッドの総決算的作品であり，これらを書くのに，体力的にも又精神的にも，作家としての力を出し尽くしてしまった様に感じられる。即ち彼ららしい傑作が書けたのは『ノストローモ』までで，『密偵』以後の作品は，極端に言えば，彼のぬけがらが惰性的に書き続けたものである。『密偵』はアイロニカルな手法を用いて書かれた傑作だと言われるが，この作品はコンラッドとしては全く異色なものであり，彼ららしい彼独特の作品とは言えない。

コンラッドの作家としての才能が，『密偵』以後衰退の一途をたどっていると思う理由らしきものは，もう一つある。それは『密偵』以後の作品の登場人物が，それまでの作品の登場人物に較べて，極端に疲労感を漂わせている点である。それがひしひしと感じられるのは，まさに『密偵』の登場人物達であり，作家コンラッドの疲労感がそのまま登場人物に伝わっているかの様である。この小論で取り上げた『西欧人の眼の下に』の中で，語り手の語学教師が自分には小説家の資質など無いと何度も断っているのは，彼の語り手と

しての不適格さに対する告白であると同時に、才能の衰えつつある作者コンラッドの苦悩に満ちた告白である。

### NOTES

- 1) Conrad: A Moralist, 藤原洋樹, *Persica* 創刊号, 岡山英語英米文学同人会, pp. 61-66
- 2) 『ジョウゼフ・コンラッド』, F・R・カール, 北星堂書店, pp. 65-66
- 3) *Under Western Eyes*, Collected Edition of the Works of Joseph Conrad, Dent, 1971, pp. 3-4
- 4) G. Jean-Aubry: *Joseph Conrad Life & Letters* Vol. Two, Heinemann, 1927, p. 65
- 5) Autocracy and War, Joseph Conrad: *Notes on Life and Letters*, Collected Edition of the Works of Joseph Conrad, Dent, 1970, p. 98
- 6) Author's Note, *Under Western Eyes*, p. viii
- 7) Ibid., p. 336
- 8) 『コンラッド』, 筑摩世界文学大系50, p. 423
- 9) Author's Preface, *The Secret Agent*, Everyman's Library, 1961, pp. viii-ix

## ON THE PROBLEM OF A NARRATOR OF “UNDER WESTERN EYES”

HIROKI FUJIWARA

*Department of Liberal Arts, Okayama University of Science  
Ridaicho 1-1, Okayama 700, JAPAN*

(Received September 24, 1982)

Conrad's "Under Western Eyes" is a very interesting novel for those who study his works because it touches his gloomy past in Poland oppressed by Russia. The only defect of the work seems to be its narrator. Conrad introduced him only in form and he himself narrates instead of the narrator. In this brief survey I tried to present the answer to why Conrad introduced the incompetent narrator at all.